

# 増田渉『魯迅伝』の原稿内容に関する考察

東 延 欣

Inquiry into the Manuscript of Masuda Wataru's *Rojinden*

DONG Yanxin

## Abstract

*Rojinden*, written by Wataru Masuda in 1931 in Shanghai, was based on Lu Xun's personal statements, reviewed by Lu Xun himself, and revised to become the final manuscript. Before *Rojinden* was published in *Kaizo* magazine, the manuscript was shortened at the request of the editor. Condensing of the manuscript was not entirely Masuda's intention and seems to have been largely influenced by the editor. It is thought that there are various reasons for this abridgement. This paper is based on a survey of the Lu Xun manuscripts in the Kansai University Library. By taking some points that can be examined as examples, I focus on the contents that are only in the original manuscripts and examine why such contents might have been deleted.

**Keywords** : 増田渉、魯迅伝、原稿、資料調査

## はじめに

増田渉は1931（昭和6）年に上海で魯迅の個人講義を受けた際に、魯迅との接触経験に基づいて『魯迅伝』を執筆し、1931（昭和6）年8月20日に完成した<sup>1)</sup>。増田は手書きの『魯迅伝』の原稿の添削を魯迅本人に依頼したことがある。増田渉が著した『魯迅の印象』によると、1932（昭和7）年2月、『魯迅伝』が『改造』に掲載される前に、編集社の要求に応じて原稿を圧縮したことがある。

…伝記の面のみをまず書いて佐藤春夫氏に送り、雑誌への紹介を頼んだ。だが原稿は虐げられて九十余枚のものを六十枚にちぢめ、半年かかってやっと掲載された<sup>2)</sup>。

削除された30枚ほどの内容というのは、1932（昭和7）年の『改造』4月号に掲載された版本や1935（昭和10）年に岩波文庫から出版された『魯迅選集』に収録された版本、両方とも削除された箇所である。また、増田渉は改造版『魯迅伝』の最後に、「私に与へられた紙数はもう尽きた。…もっとはつきり書かねばならなかったことを知っているが、種々の都合上かういふものになった。」と書いている。増田渉の記述によって、1932（昭和7）年4月号の『改造』に掲載された『魯迅伝』について、原稿を圧縮したことは完全に自分の意思ではなく、編集者の影響が大きいようである。製版上の問題で原稿が長すぎるか、内容的に不適合な部分があるか、いろいろ原因があると考えられる。それらの削除された箇所は全文にも散在しているが、主として『魯迅伝』の後半に集中している。かなり大量に削除されたため、本稿は関西大学図書館所蔵の『魯迅伝』原稿の調査を中心に、幾つか検討する余地がある箇所を例として、それら原稿のみにある内容に着目し、どうしてこのような内容が削除されたのか、を考察する。

### 一、原稿にのみ存在する内容

削除を依頼された箇所は、ほぼ文脈により重複している叙述である。また、詳細な事情に対する記述も省略されている箇所がある。あるいは増田渉自身の評価的な内容である。具体的などのような内容が削除されたのか、以下の代表的な削除された例を取り上げて詳しく分析していく。

---

1) 東延欣「増田渉『魯迅伝』の校勘記」、『或問』、2021年 137-148頁。

2) 増田渉『魯迅の印象』（角川書店、1970年）220頁。

(一) 南京政府の成立した当座は、政府の役人は誰も一律に月給三十元だった、だが教育部に彼は十五年間つとめてゐるうちに月給もだんだん昇って三百元はばかりになってゐた、…それでゐて大変な貧乏だった、何故かといふと政府が月給をくれなかったからだ、時々半分くれたり、三ヶ月も延したりで、たうとう一万元ばかりは貰わないで教育部から飛び出した。…実は北京大学で一ヶ月十六元の俸給で講義したその講義をまとめたものだが、十六元か拂へ与くて、時々八元くれたり、くれなかつたりし、教授達が政府に俸給の請求をやると、君たちは教育者でありながら、俸給を請求するなど、山賊みたいな真似をするといつて叱られたものさうだ。当時の北京政府は、政權獲得に狂奔してゐる軍閥の巢窟で、教育部などに金を出せなかつたかうだ。魯迅はそのころ貧乏で家主からは乞食のやうに虐待された。僕が時として菓子を買つて来て大家の子供にやると、子供はそれを貰つてよろこんでゐるのに、その親が捨てさせるのですよ、貧乏人の買ったものは菓子までも穢いらしい。かれはそのころの事をいつか話しそさう云つた。

この部分の前文によって、例（一）は1911（明治44）年10月武昌革命が起こつた後、魯迅が南京へ逃げており、1912（明治45）年に蔡元培の關係で南京政府の教育部に入ったばかりの時期の話であることがわかる。取り上げた例（一）の原稿のみ書いてある内容は、魯迅が南京政府時期から、後ほど政府と共に北京へ移り、15年間かけて教育部の役人及び大学の講師として就任していた期間の収入状況についての叙述である。以上の増田渉の記述、いわゆる魯迅から直接に聞いた話によると、当時の政府はきちんと給料を払っておらず、そもそも給料はかなり低いので、魯迅は「大変な貧乏だった」ということである。

まず、1912（明治45）年に成立した南京政府の給与制度を調べてみる。南京の臨時政府が成立したばかりであつたため、いろいろな事情により、法律などは完備されていなかった。北京政府へ移つた後の1912（明治45）年10月17日に至り、ようやく「中央行政官官等法」や「中央行政官官俸法」が公布された。当時の官等制度は日本が明治43年に公布した「高等官官等俸給」を模倣し<sup>3)</sup>、政府官員が9等や12級に分けられていた。錢実甫（1984）は『北洋政府時期的政治制度』で、「官俸法」による具体的な給与状況を整理した。

3) 白貴一「南京国民政府的官制、官俸及基層社会的影響」（『鄭州大学学报・哲学社会科学版』、2006年1月）。

表<sup>4)</sup>

	簡任		薦任			委任			
	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	九等
一級	600		360			150			
二級		500	340			140			
三級		400		300		130			
四級				280			115		
五級					240		105		
六級					220		95		
七級					200			80	
八級								75	
九級								70	
十級									60
十一級									55
十二級									50

実際、魯迅は自分の収入状況が非常に気になっており、日記で詳しく記載している。1912（明治45）年5月に北京へ移転した後、30日の日記で、「得津帖六十元」<sup>5)</sup>と教育部で働いてからはじめて給料をもらったことが記載されている。魯迅は1912（明治45）年2月に政府に入っており<sup>6)</sup>、最初の3か月間は給与状況が不明な状態である。まだ「官俸法」は制定されていない時期の給与制度は不完備であったため、初期の役人の具体的な給料が調査できないが、増田渉の記述「南京政府の成立した当座は、政府の役人は誰も一律に月給三十元だった。」によって、その時期政府の役人の給料は30元という可能性が高いと考えられるだろう。

そして、同年8月30日の日記「下午收本月俸百二十五元，半俸也。」によると、半俸で125元のみもらったが、魯迅の給料は3か月間で2倍以上上がった。それに、11月の給料に関する記載は「十六日午后收本月俸銀二百二十元。」とあり、魯迅の11月の給料はまた大幅に上がった。たった半年だけで60元から220元に上がったことは、実は当時でもかなりいい待遇であったと認められる。1921（大正10）年前後、給料の支払いの滞り状況が厳しくなったが、1920（大正9）年から北京の各大学で講義した給与を加えると<sup>7)</sup>、生活することは困らなかつただろうとも言える。韓大強（2015）の調査によって、魯迅の詳しい収入は「到了1913年2月魯迅的工資漲到了每月240元。1914年8月起每月280元，1916年每月300元…統計結果表：1912年5月至1926年8月，魯迅在北京期間的收入，共計銀洋大約4.1萬元（1922年日記殘缺，根據前後年的估算，有少量兌

4) 钱实甫『北洋政府时期的政治制度』（中華書局、1984年）353頁。

5) 『魯迅全集』（人民文学出版社、2005年、第15卷）3頁。

6) 顧農「魯迅進入南京教育部的時間」（『山東師院學報（哲學社會科學版）』、1980年）。

7) 吳建華「魯迅收入与消費考掘」『求索』、2006年9月。

換券和債券)、月均約245元。』<sup>8)</sup>とある。魯迅が教育部で働いていた間の収入は当時の文人階層では決して少なくないと考えられる。例えば、呉建華(2006)の調査によると、老舎が北京教育会で働いた時の給料は月に40元であり<sup>9)</sup>、茅盾が商務印書編訳所に入った時の給料は月に24元で、半年後になると30元に上がった<sup>10)</sup>。呉建華(2006)は、「客観地来講、魯迅的收入在当時社会的各階層中是属于中等的,在中国現代作家群中,那更是处于頂層級的人物。」と魯迅の収入状況を評価した。

確かに、当時の政府は役人の給料の支払いを滞らせたり、半分しか払わなかったりしていたことは事実である。しかし、以上の調査によると、魯迅が政府で働いた15年間の収入は、彼の人生の後半における印税、編集料などの収入より少ないが、貧乏とは言えないだろう。増田渉はこの『魯迅伝』を作成した後も、4か月ほど上海で魯迅と親しく接触したため、実はどのような経済状況であるか大体わかるだろう。魯迅自身は自分が貧乏人だと思っていたかもしれないが、あまりにも魯迅の個人的な情報なので、増田渉はこの部分が指摘される可能性があると考え、省略したと考えられる。

魯迅についての記述以外、増田渉が自身からの評価的な内容を大幅に削除した。例えば、原稿から削除された魯迅の作品『狂人日記』に関する評価である。

(二) 仁義道德の美名のかげに、歴史の文字と文字との間は、「人を喫って」個人が頭角を表し、社会が権力に押しひしかれたことを云ったものだが、一国の歴史ばかりでなく、一村も、一族も、一家も、みな人を喫はんとしてゐる、さういふような社会に出来てゐる支那の所謂道德に向つて、懷疑の鋭いメスを突っ込んで、腐った腫物を除去しようとしたのである。これは魯迅が、祖父の牢屋行き、父の長病、死去、取り残された女と子供との彼の家庭が、ほんとは近けのものや親類やに喫はれ、且つ彼が役人になってからも、政府は絶えず喫い会いをし、権力あるものは眼下のものを喫つた、強いものは弱いものを喫つてゐる實際を、あまりには痛切に周囲に見せつけられたことに対する批判であり反抗であった。

また、魯迅のことに関する総括的評価のような記述が削除された箇所もある。

(三) 彼は階級闘争の立場に立って、はつきりした目的によって無産階級革命文学の戦士になった。彼はだが数年来ちつとも作品を発表しない、なぜかと云へば彼の役人生活が

8) 韓大強「魯迅由北京官场转向上海文场的心路历程——基于魯迅日记中关于经济收入记载的分析」(『魯迅研究月刊』2015年12月31日)。

9) 羅常培「我与老舎」『文人笔下的文人』、岳麓書社、1981年、336頁。

10) 茅盾『我所走过的道路』、人民文学出版社、1980年、106頁。

終熄して以来、彼は追はれどほしで、いつも逃げるばかりで生活が安定しない、広東から上海へ来て、少しは落ちつくかと思はれたが、自由大同盟に下された逮捕令やから左翼作家虐殺で、またもや彼は逃げ、匿れねばならなかった、また左翼的刊行物の禁止と、出版書肆に対する弾圧とによって、彼の文章を発表するところが何所にもない、尤も左翼作家連盟は合法的な団体ではないから、普通合法的なジャーナリズムに彼の名前が見えないからと云って、彼の健在を疑ふことは出来ないが、それにしても逮捕の手を逃げ廻らねばならなかった数年来の彼は、実際に○をとることが出来なかったのだから。

例(二)、(三)は魯迅作品と魯迅本人への評価であり、増田渉個人的な意見だと考えられる。このような記述は原稿にまた何箇所も存在しているが、その後の改造版や岩波版ではほぼ全部削除された。

## 二、『魯迅の印象』に公開された原稿の内容

筆者の調査によると、『魯迅伝』の原稿から削除されたために、改造版と岩波版には載せていないが、増田渉のもう一つの魯迅に関する著書である『魯迅の印象』で公開された内容も存在する。

前述の「『魯迅伝』原稿にある魯迅の直筆訂正」で述べたように、魯迅は増田渉の原稿を校閲し、間違っている箇所、自分が発表したくない箇所について色々添削したという事実がある。増田渉は1970(昭和45)年に出版された『魯迅の印象』の中で、魯迅が発表したくないため自ら削除した3箇所と言及した。その中の1箇所、「『そのころ、僕はいつも枕頭にピストルをおいていましたよ。』という魯迅の言葉がつけ加えられているが、その私が書いたペン字を魯迅が鉛筆で消している。」<sup>11)</sup>について、増田渉はこの魯迅に削除された話を『魯迅の印象』で公開する理由は「だがその生存権の防衛のため、彼がいかに戦ったかを知る一つの挿話として私は今このことを発表する。」<sup>12)</sup>と説明している。

また、筆者は前文の「魯迅の光復会との関係についての新考察」で、魯迅が詳細な暗殺行動についての叙述部分を削除した例を取り上げた。『魯迅伝』が刊行された際に、魯迅はまだ存命中なので、増田渉は魯迅の意思を尊重し、あまりにも革命に関する敏感な話題を削除したと考えられる。増田渉は雑誌『改造』の編集社の要求に応じて原稿を圧縮した際に、魯迅の校閲を参考にした上で、魯迅本人であればどのような内容が公開されたくないかということを考慮しながら、原稿から削除した可能性が高いだろう。

11) 増田渉『魯迅の印象』(角川書店、1970年)61頁。

12) 同上。

増田渉は魯迅が自ら削除した内容を、以上述べたように『魯迅の印象』で公開した。それ以外、増田渉が自分から削除した原稿にある記述が『魯迅の印象』で公開された場合もある。まずは原稿で述べた1926（昭和元）年に魯迅が北京から厦門に逃げる途中、南京の宿屋で遭遇したことを例としてあげる。

- (一)「北京から厦門に逃げる途中、南京の宿屋で殺されそうだったところを助かりましたよ。」その時のことを彼は話した。当時の江浙地方は軍閥孫傳芳の勢力下にあった、広東から国民党の北伐軍が起され、北京が騒がしくなると、北京に於ける国民党及び国民党系の者は続々と広東方面へ下したが、それにはどうしても江浙地方を通過することが最も便利だ、軍閥孫傳芳はそれらの過激的分子をもとよりそのまま、に見逃す筈はなかった、北伐軍の勢力は益々増大し、自分の地盤も脅かされてゐる際だ、だから広東派に対して殊に警戒は厳重であった。（後、北伐軍は江西から武漢に入り、武漢から下って孫傳芳をたたきつけたが）魯迅は南京の宿屋で孫傳芳の軍人共に臨検され、荷物を調べられることになった、その荷物の一つには連れの許女史の国民党の党員章が入っていた。偶然にもその党員章がはいってある荷物が調べられることになった、「もう駄目だとその時覚悟しました。」と魯迅はついで、「だが軍人共は荷物の底の方ばかりひつくり返して、一番上に、何気ないことは置いてあった党員章には気がつかないんですよ。」「それが見つかったら殺しますか。」「多分殺すでせろ、その頃の国民党は見つける次第片っ端から殺してゐたんですからね。」

筆者の調べたところ、増田渉が述べた、魯迅が北京から南下した途中に臨検されたことについて、魯迅に関する先行研究ではほぼ言及されていない。改造版も岩波版もこの部分に関して、「途中、南京で江浙地方の軍閥であった孫傳芳の軍隊につかまって危く殺されようとしたところを逃げのびた。」<sup>13)</sup>と省略して記載されている。1976（昭和51）年の現代北京魯迅博物館魯迅研究室が編集した『魯迅研究資料』に収録された卞立強訳の『魯迅伝』の中に、訳者である卞立強がここに脚注を入れた。その脚注は、「此处待考。（調査を要する。）」<sup>14)</sup>とある。

以上のことは自宅で、夕食して酒を飲み、気分が軽くなった魯迅が食卓に並べられた皿を眺め回しながら、増田と雑談した話である<sup>15)</sup>。増田は『魯迅伝』の原稿で魯迅との対話を非常に詳しく記載している。当時、軍閥の勢力が拡大し、知識的分子がたくさん殺され、魯迅も指名手

13) 改造版にあるこの文章は印刷の問題があり、「途中、南京で江浙地方の軍閥であった孫傳芳の軍隊につかまって危く殺されようとしたところを逃げのびた。」となっている。

増田渉『魯迅伝』（『改造』1932年4月）。

14) 増田渉著、卞立強訳、『魯迅伝』（『魯迅研究資料』現代北京魯迅博物館魯迅研究室編、1976年）。

15) 増田渉『魯迅の印象』（角川書店、1970年）59頁。

配されていた。革命に参加したことがあるさすがの魯迅も政治の恐ろしさを意識していた。1926（昭和元）年、魯迅が厦門へ南下することを決めた理由は、「目的是：一、専門講書、少問別事、二、弄几文錢、以助家用。」<sup>16)</sup>となる。現在の魯迅研究では、厦門時期は魯迅の意志消沈期だと認められている。厦門へ行く途中で臨検され、党員章が発見されると殺されるような、命に関わることに実際に遭遇したのも、魯迅にとって強い打撃とも言えるだろう。命に関わることのため、魯迅は自分と非常に親しく、信頼できる人にしか言えなかったと考えられる。『魯迅の印象』によって、増田渉との雑談で、その事件の前後の革命運動をやり出した時期が話題になると、魯迅は「僕の友人はたいてい殺され、生き残っているものは少ないですよ。」「人は生存しなければならぬ。」と話したそうである。

この事件に関する記載は極めて少なく、卞立強は詳しい経緯を読んでいないため、以上のような脚注を入れたのだろう。しかし、原稿によると、臨検された事件に対する叙述は非常に詳しく、魯迅との対話もはっきり記載されている。それ故、増田渉が書いた魯迅から直接に聞いた「殺されようとしたところを逃げのびた」という話は事実の可能性が高いだろう。

もう1箇所は、魯迅は厦門で排斥され、中山大学へ赴任するために広東へ行った後、1927（昭和2）年4月に国民革命に突然「清党運動」が起こっており、魯迅にも反動政府の圧迫が加えられたところである。その時期、魯迅は沈黙して隠棲の日を送っていた<sup>17)</sup>。彼の思想を探るために訪問しに来たスパイの青年に、魯迅はわざとロシア文学論を話した。増田渉は具体的な事情を林玉堂がチャイナクリティック<sup>18)</sup> 第一巻第28期（1928年12月6日）の『Lusin』<sup>19)</sup> に書いた内容を読んでから、「スパイの青年は彼の思想をさぐるために訪問して何とかかとか話しかけた、彼はそんなときは黙って居らず、黙って居れば疑いを深くするばかりだから、滔々とスパイを前にしてアレドレエフ論やドストエフスキー論をまくし立てた。すると智慧のないスパイは彼の思想が那邊にあるかを知りかねて困惑し、彼の上官にもたราบすべき報告の要領を掴むことが出来なかった—魯迅はスパイを見縊ってゐるのだ、わざと滔々とまくし立て、彼等を茫漠たる雲霧の中に迷はせるといふ戦術を使ったのだ。」<sup>20)</sup> ということを知った。そのことについて、

16) 魯迅『致李秉中』（『魯迅全集』、2005年、第11巻）528頁。

17) 増田渉『魯迅伝』（岩波文庫、1935年）271頁。

18) チャイナクリティック（中国評論週報）、*The China Critic*という帰国留学生を主体として編集した英語の雑誌である。1928年5月31日に創刊し、1946年6月27日に終刊となった。

19) 楊昊成、「『中国評論週報』中有关魯迅的三则文字」（『魯迅研究月刊』、2013年第6期）。

楊昊成によると、この部分の原文の中国語訳文は、「魯迅の名氣太大，做不到隱姓埋名；有人派他的學生去探聽他對這、對那以及上千個別的問題的看法。但正如我說過的那樣，在中國社會如何“過活”的藝術上，魯迅可是位旧日的大師。他沉默并不是因为他怕被誘騙說漏了嘴；他做了件更為聰明的事：他大談了一些完全超出跟他對話的那些人所能理解的東西，包括安德烈耶夫和陀思妥耶夫斯基。那些參與對話的人當然是徹底驚詫地回去了——至於他們如何跟自己的上司匯報“對話”的內容，我們就不得而知了。」とある。

20) 『魯迅伝』125-126頁。改造版と岩波版はこの部分を保留したが、文章は「元氣な青年はやって来て彼に何故沈黙してゐるかと責めた。彼は答へた口を開けば殺されるばかりではないかと。スパイの青年は彼の



増田渉が魯迅にたずねた際の対話は以下のように原稿に記載されている。

（二）右のことを僕は林玉堂のチャイナクリティクに書いたもので知ったので魯迅に訊いてみたら「そんなこともありましたよ、実は彼等はスパイなんかになる資格もない馬鹿でしたよ。」「学生ですかそのスパイは。」「学生です、だが何も知らないんです。どうせ反動派の狗になるようだから、そんなもんです。学生といへばまた変てこなやつか居ましたよ。僕がまだ学校に出てゐるときで、僕は一人で学校に宿直してゐましたが、誰も外にゐないから時々、脅迫に來ましたよ、だが僕は脅迫は怖れませんが、慣れてゐますからね、或る時は腕力で僕と脅迫したから、僕が、僕もゴロツキだからその学生をブン殴ってやりました、さうすると逃げ出したんですよ、ハハハ」

例（二）の原稿にあるスパイの青年が訪問しに來たことについての魯迅との対話は、増田渉が「私がかつて上海で書いた『魯迅伝』の初稿をいまそのまま写したのである。」という記述で『魯迅の印象』に載せられている。

魯迅が中山大学でスパイの青年に思想を探られたことに関する記載がある。例えば、邱煥星（2019）の調査によると、薛綏之編集の『魯迅生平史料彙編』に、「后台は国民党的青年部長甘乃光的左派青年團的人也去找魯迅。」<sup>21)</sup>、「甘乃光安排《国民新聞》副刊編輯梁式為打听魯迅消息的專員。」<sup>22)</sup>という記載がある。また、「左派青年團負責人李秀然則以中大学生会主席の名義、邀請魯迅參加学生会召开的歡迎大会。」<sup>23)</sup>という記述もある。しかし、魯迅が一人で学校に宿直した際に、学生に脅迫されると、その学生を殴ったことに関する記載はほとんどない。増田渉が書いた、自分（魯迅）に殴られて逃げ出した学生のことを話すと、「ハハハ」と笑った魯迅は、確かに「皮肉や毒舌の影はなく、むしろ子供のように天真爛漫な人柄」<sup>24)</sup>と見られる。以上のことも、魯迅が自分の生存権を防衛するために戦った証拠であろう。

なお、この部分の記述では、魯迅のところに訪問した青年はスパイの他に、なぜ沈黙しているかと責めてきた革命的な青年がいたことも分かる。前文に述べた卞立強訳では、ここに「實際魯迅并未沉默，除写戰鬥文章外，還在七月間公开演說。」という脚注を入れた。卞立強訳の底本は改造版となり、改造版では削除されたが、実際、青年が魯迅のところに訪問したことについて、増田渉は林玉堂がチャイナクリティクに書いたもので最初に知った。その後、魯迅に

---

思想を探るために訪問しては、彼に露骨なるロシヤ文學論を滔々ときかされて、却って面喰って、自分もそんな男と会話をしたといふ罪名の卷添を食ふことを恐れて上長に報告を怠った。」となっている。

21) 黄英博『血腥的斗争和伟大的跃进——记鲁迅先生应聘来穗』（薛綏之主编『魯迅生平史料汇编』第4辑、天津人民出版社1983年）386頁。

22) 尸一（梁式）『可记的旧事』（薛綏之主编『魯迅生平史料汇编』第4辑、天津人民出版社、1983年）386頁。

23) 邱煥星「广州魯迅与“在朝革命”」（『文学評論』、2019年）。

24) 伊藤瀬平、中島利郎編『魯迅増田渉師弟答問集』、汲古書院、1986年。

訊ねた。それ故、魯迅の沈黙についての記述は林玉堂によるものであり、増田はここで林玉堂の記述を引用したわけである。また、『魯迅伝』原稿によると、例（三）のように実は魯迅が沈黙していなかったことも書いてある。

（三）彼はある時僕に話した「僕の学生を共産党だといってつかまへたので、僕は学校へ行って—その頃僕は学校を辞してゐたが—彼は共産党ぢやないから擱へるなど抗議した。すると学校の当局者はいや共産党員はその親だつて知らない、君に彼が共産党員でないといふことが分る筈がないと言ふんです。で、僕が言ってやった、それぢやどうして君等には彼が党員だといふことが分るんだと、すると返事が出来ないんだ。だがやっぱり解放しなかつた。またある僕の学生が擱へられて一千弗出せば釈放するといふのだらうが、で、僕は僕のある著述の版權を出版屋へ一千弗で賣つ拂ふ交渉をはじめた、するとまだ出版屋との交渉がまとまらないうちにその学生は殺されたといふことが分つた。…

魯迅は1927（昭和2）年1月に中山大學で働き始めたが、「清党運動」が原因で、同年4月にすでに辞めた。以上の原稿にある記述によって、魯迅は学生を救うために抗議し、保釈金を払えば学生が解放されると聞いて、大金を出し合うため色々工夫したということを増田渉に教えた。魯迅は中山大學の歓迎会で、革命の勢いがまだ下火である広東へ逃げてきた自分は戦士でも革命家でもない、という声明を發表した。生存権を大切にしている魯迅は沈黙するつもりだったが、実際に、卞立強訳の脚注に書いたように7月に公開演説をしたり、学生を救うために版權を売って保釈金を集めたり、彼は自分なりに戦闘し、他人の生命も守っていた。増田渉によると、「彼はつねに生命を尊重し、生命を尊重するという根本の上に、あらゆる人生の仕事の意味を見いだそうとしていたようだ。」とある。例（三）に関しては、原稿から削除されたため、卞立強は魯迅が沈黙していなかったことを強調し、脚注を入れたと考えられる。しかし、増田渉が原稿に書いた、魯迅が学生を救うために版權を売って保釈金を集めていたことに関する記載は極めて少なく、確認することは難しい。が、魯迅本人から増田に教えた内容であるため、真実のことだと認められる可能性が高いだろう。

例（一）（二）の2箇所は『魯迅伝』の原稿にあり、改造版や岩波版にも存在していない内容である。増田渉は『魯迅伝』を改造雑誌で出版させるために、原稿を圧縮して自ら削除した。事情に関する叙述は少し異なるが、内容は一緒だし、特に魯迅との対話はそのまま『魯迅の印象』に載せてある。増田渉は魯迅がまだ存命のため、様々な事情を考慮し、出版された改造版や岩波版の『魯迅伝』で革命に関する記述を省略したと考えられる。増田渉が書いたその時期の魯迅は、死ぬのが怖い普通の人間に見え、自分の命を守るために戦っていた魯迅の真実の姿となっているだろう。

## おわりに

本稿は、増田渉の『魯迅伝』原稿から削除された内容についての調査をした。増田渉がそれらの部分を削除した理由は、文脈により叙述が重複している、魯迅の個人的な事情を守るなどと考えられる。出版された改造版と岩波版の『魯迅伝』の裏には、作者である増田渉の苦心が隠されている。また、『魯迅伝』として刊行されなかった原稿から削除された内容は、『魯迅の印象』の中で公開された内容もある。増田は真の魯迅を世間に知られるため、魯迅の逝去後、より平和な時代になった際に、自分の本である『魯迅の印象』で公開することにしたのだろう。さらに、『魯迅の印象』に載せられた少しの内容以外、削除されたのは原稿のみにある未公開の内容である。それ故、今までの魯迅研究ではほぼ言及されていない記述は何箇所が発見された。増田渉の記述によって、以下のことが明らかになった。

- [1] 南京政府の成立初期、「官俸法」はまだ制定されていないため、役人の具体的な給料は不明だが、30元という可能性が高いと考えられる。
- [2] 1926（昭和元）年、魯迅は厦門へ南下する途中で軍閥に臨検され、党員章が発見されると殺されるという状況に遭遇した。
- [3] 魯迅が中山大学に宿直した際に、学生に脅迫され、その学生を殴ったことがある。
- [4] 1927（昭和2）年頃、魯迅は捕まえられた学生を救うために、自分の著書の版權を売って保釈金を集めようとしたことがある。

増田渉は『魯迅の印象』で、「私が書いているのは、彼からいつか聞いたから書いたので、全然無根のことを、思いつきでかかってに書くはずはない。」と書いており、『魯迅伝』の原稿を魯迅に校閲されたこともある。しかし、晩年の魯迅は幾らか記憶の偏差が出た可能性があるため、全てのことを完全に正確に覚え、増田に教えたわけではないと考えられる。細かいところは検討する余地が存在しているが、基本的な事柄は実際に起こったと認められるだろう。

以上挙げた例以外、実際に原稿から削除された部分はまだまだたくさんある。すべて例として挙げるができないし、特に理由はなく、作者である増田渉の当時の気分により添削された箇所が存在もあると認められる。これからの更なる調査が必要であろう。

増田渉の『魯迅伝』原稿は魯迅研究と関連し、その重要性が揺らぐことはないと思われ。本稿を原稿研究に基づく魯迅に関する研究の第一歩として、今後の新たな考察を進めたいと考えている。

